

ハリウッド映画にみるジェンダー問題の歴史
— Well. Nobody is perfect —

岩元 奏

目次

I 章. 緒言 (総論)

- 第1節 ハリウッド映画とジェンダー問題 P
- 第2節 本論文の目指すもの P
- 第3節 用語の解説 P
- 第4節 ハリウッド映画産業について P
- 第5節 プロダクション・コードについて P

II 章. 物語の中のゲイの役割 (1920年～1940年) P

- 第1節 変てこキャラと女々しいキャラ P
- 第2節 けばけばキャラとお気楽キャラ P
- 第3節 おどろおどろしいキャラ P
- 第4節 本格的な犯罪者のキャラ P
- 第5節 検閲によるゲイ映画冬の時代 P
- 第6節 文芸作品の中のゲイの姿 P
- 第7節 新しいコメディーの中のゲイの姿 P

III 章. 多様になったゲイ映画の潮流 P

- 第1節 暗い社会派映画の中のゲイの姿 P
- 第2節 スタイリッシュなゲイの姿再び P
- 第3節 ゲイの人権活動を描くドキュメンタリー P
- 第4節 女装した男が気づく女性性の本質 P

IV 章. 理解が深まりつつあるゲイ映画の現状 P

- 第1節 根強く残るゲイへの偏見 P
- 第2節 新しい視点によるゲイとレズビアンのお話 P

終章

I 章. 緒言 (総論)

第1節 ハリウッド映画とジェンダー問題

ハリウッド映画はアメリカ文化の代表ともいえる上に巨大な産業として成り立っている。「今のアメリカを支配しているのは、ワシントンD. C (政治) とニューヨーク (資金力) とハリウッド (メディア産業) の鉄の三角形である」というほど、ハリウッド映画の存在はアメリカでも世界でも娯楽以上のものとして存在する (2000 副島隆彦)。ハリウッド映画の特徴は多様さにあるが、それでも、多くのタブーが存在しているといわれている。本論で取り上げる「同性愛」や「ジェンダー」の問題は、映画というメディアにとっても極めてナーバスな題材であり、どのようにこれらの問題を表現するかは、時代や価値観の変遷とともに変化してきた。これらの問題は、かつては映画のメインテーマとして取り上げられることが少なかったために、同性愛やジェンダー問題じたいを、肉体的な表現はもとより、関係性を示すような仕草を直接的に映像として表現することも少なかった。現実の世界には古くから存在することであるのに、映画の世界では長くタブーとされ続けられた。藤井仁子によれば、すでに多くの映画研究者から古典的ハリウッド映画が人種やジェンダー的マイノリティ集団を表象する際に登場人物の容姿や台詞、メーキャップや衣装などの一連の文化的コードを用いて、その集団のステレオタイプを作りあげてきたことは指摘されている (2008 p121)。これらのステレオタイプのバリエーションの定着については、第2章「物語の中のゲイの役割」で詳しく論じていく。

1970年以降になって、ようやく同性愛描写はファッションやアート、ミュージカルなどを飾るものとして映画に組み込まれる状態が訪れるが、これといえども、ベトナム戦争後傷ついたアメリカ社会の抱える様々な問題である麻薬の蔓延や家族機能の崩壊といったものが背景に存在する。この時期の同性愛者たちの映画は、2つの大きな流れをもっていた。ひとつは、ファッション性のつよい音楽をたっぷり取り入れた映画、もう一つは、社会派映画という両極端の傾向をもっていた。社会派の映画は、1969年の *Midnight Cowboy* が先鞭を付けたと言っても過言ではないだろう。まさに、ゲイの映画が大きく多様化する時代が始まろうとしていたのである。また、同性愛者の性交渉によって伝染することが原因の一つであるHIV感染などが大きな社会問題になってきた80年代には、ゲイ達の人権問題を中心テーマにした映画が作られるようになる。ただし、啓蒙や教育を目的として作られた映画が、いつの間にか「同性愛者」への恐れや、同性愛者はこういう人間だ」といったステレオタイプを人々の心に植えつける結果となることもあった。現代のハリウッド映画もいまだに完全にそのステレオタイプは消えていない。これらの大きく変化していった同性愛映画の表現と社会問題となったゲイの人たちの困窮や勇気を表現する映画の動きについては、第3章の「多様になったゲイ映画の潮流」で論じていく。

1990年を越えると、ゲイ (Gay) やレズビアン (Lesbian) の社会生活を日常的な視点でとらえた映画や、社会と同性愛者たちの関わり方をじっくり考察した映画が続々と作られるようになる。また、それまで描かれることの少なかったバイセクシュアル (Bisexual) やトランスジェンダー (Transgender) をテーマにした映画もつくられるようになった。いわゆる GLBT という総称でくられる映画が数多く製作されるようになったのである。この近年の傾向については、第4章の「理解が深まりつつあるゲイ映画の現状」で詳述する。

第2節 本論文の目指すもの

本論文は、ハリウッドの大衆映画におけるゲイの描かれ方を概観し、それぞれの時代の人たちが、

どのようにゲイを理解していたか、つまり、「どのような部分に共感し、どのような部分を許容し、どのような部分を拒否したか」を考察することによってゲイとアメリカ社会がどのように関連したかを明らかにすることを目論んだものである。ゲイを描くと言っても、時代の先を行く映画がある一方で、商業映画の常として、時代の価値観から逸脱しないように慎重に作られた映画も制作された。時代への読みを間違えて失敗したものもあり、工夫に工夫を重ねて重要なテーマを忍ばせることに成功した映画もあった。しかし、歴史に残っていった映画の多くは、必ず創意に満ちており、才気と勘のよさ、確実な手腕を備えているものが多く、名監督や名優たちが関わっているものばかりである。また、そのような映画作りに携わった人々は勇気に満ちており、時代に立ち向かっていった彼らや彼女らの姿に私達は深い感動を感じる。卒業論文という小規模な形で、この大きなテーマに挑むことは極めて困難な作業であり、当然ハリウッド映画全体を俎上に乗せて論じることは不可能である。したがって、本論分では時代を代表する映画を取り上げ、その中にあるゲイ的な要素を取り出し、これらをその時代の視野で概観するとともに、現代の映画の中にどのような形で受け継がれているのかという歴史的な視野でも考察することで、ゲイの表現の多様さをできるだけ整理してみたいと思う。

第3節 用語の解説

本論では、同性愛的特異性の総称として「ゲイ gay」という言葉を用いる。細かく分けると、男性の同性愛者を表す「ゲイ」、女性の同性愛者を表す「レズビアン lesbian」両性に性的魅力を感じる（両性具有的な）「バイセクシュアル bisexual」、自分のジェンダー的な性のみでなく肉体的な性別に違和感を感じる「性同一性障害 transgender」（日本語には適切な訳語がないために、そのままトランスジェンダーといわれる）などがある。日本人の例をあげると、オスギとピーコ、ニットデザイナーの広瀬光治はゲイであるし、カルーセル麻紀（旧名は平原 徹男というごつい名をした釧路出身のニューハーフ）や、はるな愛はトランスジェンダーであろう。レズビアンとバイセクシュアルはなかなかカミングアウトしにくいので、だれと特定することはできないが、女性のみでの集団組織の中ではレズビアン的な行動が思春期の女子高生などには認められることもあるので、検討が付きやすい。バイセクシュアルなホモとヘテロの混じった状態は、ゲイの一部には見られることがあり、性的な放埒さを示すこともあるので、別格という感じがする。映画には取り上げられにくい性的な特徴ともいえる。さきほどの緒言でも述べたように、これら4つの同性愛的な特徴を、それぞれの頭文字をひとつにまとめて# GLBTと総称することもある。ひとまとめにすること自体は便利であるが、まとめることに対する異論もあるので、本論では必要最小限にしか用いていない。

第4節 ハリウッド映画産業について

まずハリウッドの視点から同性愛を考察する前に「ハリウッド映画とは一体何なのか」ということを説明しておく必要がある。もともとハリウッドの映画産業を作り上げたのは主にユダヤ人の移民で、ユダヤ人は他の仕事には迫害を受けており、映画という新しい娯楽ビジネスに注目した。多大な影響力を持つといわれ、時に政治や宗教団体などから強い批判を受けるハリウッドとは一体、映画界の「どの組織」や「人物」を指して述べられてきたのか。

2008年8月15日サンタモニカで開かれたタイム誌主催「ハリウッドとワシントンの関係を考える」というパネルディスカッションの中で、Motion Pictures associationのジャック・バレンティ氏はこのように述べた。「（アメリカンインディアンの）ハリウッドはイロクオイ連合のようなものである」つまり、独自のルールと習慣を持ったグループの集まりなのである。ハリウッドは450

もの独立した製作会社と 90000 人ものメンバーを抱えた映画俳優組合をもっている。ウォルト・ディズニー、ドリームワークス、MGM、パラマウント・ピクチャーズ、ソニー・ピクチャーズ、20 世紀フォックス、ユニバーサルスタジオ、ワーナーブラザーズ、この 8 つの映画会社がこの中心を占める。そのため「その映画は作ってはいけない」という権限は誰にもなく、ハリウッドには確固とした実体が存在しないということになる。（中川慎也 2001）

しかしハリウッドの映画産業が娯楽として大きくなればなるほど、大衆娯楽文化というものが生まれ、映画がビジネスとしての成功を収めなければいけなくなる。ほとんどの大衆にその映画を気に入ってもらえるように、あるいは共感ができるものがなければ娯楽として、ビジネスとして成功しない。ライターの奥谷海人によれば、ハリウッドは時代の流れに合わせて自らの体質を変え、作品の多様化を推し進めながら耐え続けてきたという。（2009）どんなテーマでも製作される自由があったとしても、大衆に喜ばなければ映画として失敗に終わるのだ。ここで重要な点は、さきほども述べたようにハリウッドの映画産業がユダヤ人から作られたことだ。そのことと関わる 1950 年代から 1960 年代の問題について後ほど述べる。

第 5 節 プロダクション・コードについて

しかしながら、1934 年から 1966 年までの間にはアメリカ映画製作者配給者協会（MPPDA）がプロダクション・コード（映画製作論理規定）というものをつくった。これは性描写や裸体、暴力の表現、警察などの社会的な権威の描き方、男女がベッドの中に実際入るシーンなど、さまざまなシーンを細かく規定したコードである。（大場正明 2002）これがまさに「その映画を作ってはいけない」と言っているようなものである。もちろん、このコードにも同性愛描写も厳しく限られていた。アメリカの映画製作者たちは、コードの禁止事項に抵触しないように撮影に入る前に映画の脚本を MPPDA の下部組織 PCA（映画製作論理規定管理局）に提出し、修正を要求された場合にはこれに応じ、完成してからも再びチェックを入れられる。（上島春彦＋遠山純生 2001）これはあくまでもハリウッドが連邦政府や宗教団体等からの圧力から身を守るために自主組織である MPPDA と下部組織 PCA が作ったコードなのだ。そして映画産業界の自主性と独立性を維持するためでもあった。

ここでプロダクション・コードを取り上げたには、大きな理由がある。このコードによって明らかになったことがあるからだ。それは「ハリウッド映画」で何が描けて、何が描けないかを言明し、何が好ましい主題であり、何が避けるべき主題であるかを作り手に教え、映画製作上のポリシーをはっきりと宣言したことだ。つまり、間接的ではあるが、同性愛描写もふくめ、人種差別や格差、偏見、現実にその時代で実際認められないもの、問題になるものは避けながら、理想を作り上げ、「幸せの象徴」になるものを製作していった。まるで何が正しい映画、何が悪い映画ともいえるように「正しい人間」「正しくない人間」分別されているような表現である。映画製作者側の意図とは別に、ハリウッド産業界自身が原因で、セクシュアル・マイノリティや同性愛描写もすべて避け、連邦政治や宗教団体の言いなりになったとも思える。コードが作られた直接の目的はギャング映画に対する批判牽制の目的で作られたが、厳格に運用されたとはいえなかった。—それゆえ、加藤によればカトリック団体によるボイコットか、それともコードの厳格な運用かの二者択一をせまられた結果、罰則規定をふくむ PCA の発足と権力強化によってコードの完全実施を各界に約束することになる。（加藤 1996）

実際にプロダクション・コードを読むとさまざまな制限がわかりやすく書かれている。

観客の道徳水準を低下させる映画は、これを製作してはならない。それゆえ決して観客を犯罪、悪事、邪悪もしくは邪悪もしくは罪悪について共感させてはならない。

- すなわち 1. 悪が魅力的あるいは魅惑的であるように見せられ、善がつまらなく見せられる場合。
2. 観客の共感が犯罪、悪事、邪悪、罪悪の側に寄せられる場合。また善、名誉、潔白、清純もしくは正直に対して観客に反感を抱かせる映画の場合も同様である。

その上、宗教を扱った場合の規定にこう記されている。

- 1. 映画もしくはその一挿話は、いかなる宗教も嘲笑的に扱ってはならない。
2. 聖職者は、聖職者として登場した場合には、滑稽な人物もしくは悪役として用いてはならない。
3. いかなる実在の宗教儀式も、注意と敬意をもって扱わなければならない。（加藤 1996）

すべての規定を読んだときに「道徳的」の重要性、宗教への大きな尊重、宗教へ反してはいけないタブーを感じとれた。20世紀からキリスト強敵宗教的道徳的視点からみて、同性愛は異常行為もしくは犯罪と見なされていたため、この規定はその宗教が原因だと思える。

プロダクション・コードが作られてから1934年4月にカトリック教会系の検閲団体“リージョン・オブ・ディーセンシー”（良識委員会）が設立された。（上島 2001）委員会は不道徳で自由気ままな映画の上映に強く反しているカトリック司教たちから成る組織だ。連邦政府や宗教団体、そして良識委員会の中では、同性愛者に対して強く反対していた人たちが多く存在していたため、映画製作者たちはさらに慎重に映画を作らなければいけなくなった。

1960年代末後半以降、プロダクション・コードが完全に崩壊されてからは、ゲイのロマンスを描く映画が作られた。しかし、その多くはインディペンデント映画として作られ、アート・シアターのみでの公開となった。藤井によれば、主流ハリウッド映画産業においては、同性愛問題は依然として敬遠されるテーマであるという。

では、それを踏まえた上でこれから今までの同性愛を取り入れた映画を、みていき、どんな同性愛の描写の変化を考察してみる。

II 章. 物語の中のゲイの役割（1920年～1940年）

第1節 変てこキャラと女々しいキャラ

～コメディにおけるゲイの姿～

ハリウッドのプロダクション・コードが自主規制する以前は、映画作りも多少楽だったかもしれない。あきらかにゲイを思われる役柄が、コメディというジャンルにおいて、変てこな（queer）キャラクターとして数多く登場する。後年に至るまで、ゲイ映画にはコメディの名作が多いが、その伝統は初期の映画作りの現場で形作られていた。アラスカの金鉱掘りを扱った1923年の「The Soilers（土まみれの労働者という意）、監督：Ralph Ceder」は、無声映画以来の喜劇役者スタン・ローレルが主演のドタバタ喜劇で、ここでは明らかにけばけばしく（flamboyant）、女っぽい（effeminate, sissy）ゲイのカウボーイ達が登場して笑いを誘っている¹⁾。ゲイのカウボーイという設定は、後年に滑稽な物語ではなく、より現実的な世界を描いたシリアスなドラマに中に取り入れられて、1969年の「Midnight Cowboy」、2006年の「Brokeback Mountain」へと繋がっていく。Midnight Cowboyにおいては、主人公であるテキサス出身のカウボーイが都会の底辺の生活中での様々な葛藤が描かれている。Brokeback Mountainの場合は、マッチョなカウボーイ達の中

に潜むゲイの心が新鮮に迎えられて、性差を超えた純愛であるとする解説もある。歴史をさかのぼると、カウボーイのゲイという設定は、1920年代という古い時代にキャラクターとしてはすでに描かれていたのである。ただし、コメディにおけるゲイ配役の用法は「おかしみ」をスパイスとして加えるものや、よくても「主役の脇役」として描かれるものまでであり、その表現法も控えめであり、明らかにゲイという設定ではなく行動のパターンや身だしなみという視覚的な表現や“*Oh my dear*（あら、まあ）”（*The Soilers*）などという言葉遣いによって描かれることが多い。いわば、ある種の「ゲイの型」というべき映画言語が記号としてすでに存在していたことを示している。つぎに、「主役の脇役」の例としてのゲイの存在が確立した例として、お洒落なミュージカル映画について紹介する。

第2節 けばけばキャラとお気楽キャラ

～ミュージカル映画におけるゲイの姿～

ミュージカル映画では、ゲイは好人物のお気楽キャラという人物として描かれる。映画の主人公である容姿端麗（男であれ、女であれ）な人物の友人や、恋人といった役柄で登場する。たとえば、最高のダンサーにしてミュージカル大スターのフレッド・アステアが主演した『コンチネンタル』“*The Gay Divorcee*”（1934）『トップ・ハット』“*Top Hat*”（1935）では、アステアの男友達（気のいい独身男）としてゲイ的な人物が登場して、ストーリーの進行に積極的に関与する。『コンチネンタル』の場合は、アステア自身が離婚した男という設定であるから、独身男の2人組ということになっている。この独身男の2人組という組み合わせは、その後のハリウッド映画にしばしば用いられる設定であるが、注意して見ていると少なからずゲイの組み合わせを匂わせる仕掛けが施してある。ゲイが登場するミュージカルの嚆矢となっているのは『ブロードウェイ・メロディ』“*The Broadway Melody*”（1929）である。厳密にはこの映画はミュージカルの舞台裏を描いたものだが、やはり女々しくて気まぐれな（*fey*）男性が登場する。しかし、これらのミュージカル映画に描かれたゲイ的な男性も、一方では女性との交際を積極的にすすめるような部分も同時に描かれており、両性具有的 *bisexual* 的でもあるという指摘もなされている¹⁾。

第3節 おどろおどろしいキャラ

～ホラー映画におけるゲイの姿～

少し時代が下ると、ゲイの登場人物は、おどろおどろしくて奇怪な「同性愛的主人公」として登場する。いわゆるホラー系の映画である。『フランケンシュタインの花嫁』“*Bride of Frankenstein*”（1935）『女ドラキュラ』“*Dracula's Daughter*”（1936）などは、本格的怪奇スリラー映画の古典であり、主人公である女性の役柄にどちらにもレズビアン的な要素が塗りこめられている。このような性格付けは、血や人殺しといった題材を描くときのスパイスとしては申し分ないものであったろうし、だからこそ「主役」にもなりえたわけである。『フランケンシュタインの花嫁』では、フランケンシュタインを作った狂人の博士（後世のマッド・サイエンティスト映画の土台となっている役柄である）が、孤独な人造人間であるフランケンシュタインを慰めようと花嫁をつくらせようという設定である。このような試み自体、神がアダムとイブを作ったとされる旧約聖書創世記のパロディとなっているために、禁欲的宗教国家のアメリカではきわどい映画作りとなっている。ハリウッドで倫理規定が策定される前とはいいいながら、危険な設定が可能であったのは、やはり、物語が現実からかけ離れたゴシック的な怪奇映画であったためであろう。『女ドラキュラ』では父ドラキュラのせいで自分も血を受け継いで吸血鬼になったドラキュラの娘がうら

若い処女の血を吸うというエロティックなシーンがあり、レズビアンの美学の曙と呼ばれた、ドラキュラの娘自身が、父親から受け継いだ吸血鬼としての運命を呪うという近代的自我の問題までも取り上げられていて、哲学的審美的ゴシック映画としての異彩を放っている。「愛」と「死」と「悲しみ」という組み合わせのゲイ（レズビアン）映画は現代まで続く普遍的なテーマであり、これが、先に述べた「滑稽さ」「軽さ」「美しさ」を持ったコメディ映画と同居していた時代がハリウッドの初期から存在しえたことに驚かされる。さらにいえば、この時代が第一次大戦後に起こった大恐慌“Great Depression”から第二次大戦までの時代と重なっていることに、歴史の不思議さを感じないではいられない。

第4節 本格的な犯罪者のキャラ

～ヒッチコックがサスペンス映画の新しい犯人像を作った～

1940年以前と以後では、ハリウッド映画に登場する同性愛者（男性のゲイだろうと女性のレズビアンだろうと）の受け持つ役柄と物語との関わり合いの重要さは劇的に変化する。

40年に『Rebecca』（邦題：レベッカ）を製作したヒッチコックは、このサイコスリラーの中で、ダンバース夫人という特異な性質をもった召使いを登場させる。レベッカは大富豪の貴族マクシミリアン・デ・ウィンター（舞台の名優ローレンス・オリビエ Sir Lawrence Olivier が演じている）の亡き妻であり、映画の中には実際に登場はしない、ただ語られる存在としてのみ登場する。召使いのダンバース夫人は、今は亡きレベッカを心の底から敬愛する中年の女性として描かれる。ただし、この「敬愛」はレベッカの下着にまでも寄せられているほどの愛情であることもヒッチコックは描いて見せ、ダンバース夫人の特異な愛の形をほのめかしている。物語中で、貴族の主人であるマクシミリアンが年若い女性（ジョーン・フォンテン）を後妻として迎えるが、ことあるごとにダンバース夫人はこの若い妻に辛く当り、彼女と夫を別れさせようと、さまざまな企みを巡らす。ダンバース夫人の若い妻への異常な憎悪と亡きレベッカへの異常な執着は、彼女の同性愛的な性癖のためであるようにヒッチコックは描いており、ダンバース夫人を演じたジュディス・アンダーソン Judith Anderson の鬼気迫る演技はアカデミー賞助演女優賞にノミネートされたほどであった。（保存版アカデミー賞 2004）この映画におけるダンバース夫人の性的な特異性と性格的なゆがみの深い関係は、結果的にゲイが異常性格者であるかのような印象を与えるという理由で、現代においては敬遠されるかもしれない。しかし、このような状況は大いにありそうな設定であることも事実であり、ジュディス・アンダーソンの名演がさらに説得力を与えていることも、ゲイの存在を重要なものとしている。1948年『Rope』（邦題：ロープ）もアルフレッド・ヒッチコック監督の手になるものであり、ゲイの大学生2人が結託して同じ学生の友人を殺し、完全犯罪をもくろむというストーリーである。ここには、優秀な人間は劣った人間を殺す権利を有するという特殊な価値観を2人の犯罪者が共有しているという設定があり、その根底にはニーチェ的な虚無主義が存在することも描かれている辺りが今日的である。また、「完全犯罪」という美学に惹かれているという設定も観客の心に戦慄を掻き立てる。このような犯罪者たちのねじれた審美的（耽美的ともいえる）価値観とゲイであることの組み合わせは、前章で述べたドラキュラやフランケンシュタインのような化け物映画の見られるゴシック的なおどろおどろしさをも含んでおり、後世の映画に大きな影響を与えずにはいられなかった。

たとえば、「The Silence Of The Lambs（羊たちの沈黙、1991年）」でアンソニー・ホプキンス Anthony Hopkins によるレクターハンニバル博士や女性連続殺人犯の男などはゲイの特徴をあますところなく演じている。ヒッチコックは1951年に The Strangers On A Train（邦題：見知

らぬ乗客)を製作し、男2人組の犯罪者にゲイ的な要素を与えている。いわゆる「交換殺人もの」といふ古典サスペンスのお手本のような本作品は、脚本がパトリア・ハイスミスノのほか、レイモンド・チャンドラーもスタッフに加わるといふ贅沢な陣容となっていることなども注目に値する。同じ犯罪映画でも、純粋なサスペンスものとして有名なのが、ダシール・ハメット原作のサンフランシスコの名探偵サム・スペードが登場する *The Maltese Falcon* (邦題: マルタの鷹 1941) である。(藤井 2008) このストーリー自体はワーナーブラザーズによって3度も映画化されたが、中でも第3作目(ジョン・ヒューストン脚本・監督、主演ハンフリー・ボガート)は、大ヒットとなった。当時の映画の常として、敵役のゲイの男性が登場する。これは、どちらかというといふゲイであることと性格的異常性との結びつきはあまり強くなく描かれていて、犯罪者はスタイリッシュでお洒落な男たちである。風俗的なゲイの姿とでもいふべき描き方も、やはりその後のハリウッド映画におけるゲイのステレオタイプとして定着していく。

第5節 検閲によるゲイ映画冬の時代

～非米活動委員会とマッカーシズムによる弾圧～

1938年から1975年まで存在したアメリカ上院の非米活動委員会は、反共産主義というスローガン掲げて、米国内の反米的活動をするもの達をFBIと協力して取り締まった。(大場 2002) 米ソ冷戦時代にあつて、アメリカの共和党員の保守主義達を中心となつて、自国民をターゲットにした監視体制を敷いた時期であつた。いわゆるマッカーシズムの赤狩りが登場するのは1950～54年の時期で、ハリウッドの映画人に対する弾圧が強化されたが、実際の証人喚問や尋問などは1947年の9日間におよぶ大規模な公聴会を皮切りに始まつており、1950年前後から多くのハリウッド映画関係者が職を追われることになつた。そのなかには、チャーリーチャップリンやオーソン・ウエルズのようなトップクラスの俳優たちもいた。この病的なまでの保守主義の旋風は、共産主義者のバッシングのみでなく人種差別も推進したので、黒人やユダヤ人もその標的となつている。ハリウッドから追われたものの中にも多くのユダヤ人たちが存在した上に、ユダヤ系の芸術家(指揮者のレナードバーンスタインや作曲家のコーブランド、ジャズクラリネット奏者のアーティ・ショウ)や科学者のオッペンハイマー(原子爆弾の開発者で、マンハッタン計画の推進者でもあつた)までもが何らかの形で弾圧を受けた。加藤によればアメリカ上院議員であつたジョー・マッカーシーが失脚するのは1954年であつたが、このような傾向は、50年全般を通して続き、60年代になつても温存されることとなる。(1996) 非米活動委員会がなくなつた訳ではなかつたからである。また、ベトナム戦争が1954年に勃発したため、戦時下の混乱、愛国的道徳感の増強といふ保守的で不穏な社会情勢を更に継続させた。

このような社会では、ゲイをありのままに扱つた映画の製作が抑制されたのも無理はない。(ベトナム戦争は1975年まで続いたが、この戦争の終わりと、非米活動委員会の終焉が同じ年であつたことは、この年が時代をくっきりと分ける分水嶺となつていることを示している。)

映画製作倫理規定(プロダクション・コード)によるゲイの映画製作そのものが抑圧されたかといふと、事実は全く逆であつた。それは、むしろ緩和されたのである。では、晴れてゲイの問題を正面から取り組めるようになったかといふと、事実はまるで逆であつた。セルロイド・クローゼットの著者であるヴィート・ルッソ Vito Russoによれば、この時代こそが、へそ曲がりの検閲の時代であつた。同書の第2章の標題を、彼は以下のように名付けた。“*The Way We Weren't: The Invisible Years*”これは、「ありのままではない姿を強いられた私たちは、透明人間のように見えざる者としてこの時代を過ごした」といふ意味である。この章において、ルッソは製作倫理規定の運

用の変化（へそ曲がりの運用）が、いかにハリウッド映画に影響を与えたのかを論じている。一言で言うと、いわゆるなよなよしたゲイのキャラクターは影を潜め、ひずんだ形のゲイ達が描かれた。このゲイの姿を、ルッツは更に「クローゼットから追い出された」状態という比喻を用いて説明している。“Frightening the Horses: Out of the Closets and Into the Shadows.”（馬を驚かされ、納屋から追い出され、影へと追い出された）」ゲイ達は、自分がゲイであることを呪い、苦しみ、場合によっては自殺をするという姿に描かれたのである。今までのように、別格としてゲイが描かれた安全な場所であるクローゼットに潜んでいることはもうできなくなったのである。

第6節 文芸作品の中のゲイの姿

～悲嘆するゲイ、墮ちていくゲイ～

このような時代の中で、劇作家テネシー・ウィリアムズ Tennessee Williams による2つの作品、『焼けたトタン屋根の猫』Cat On A Hot Tin Roof, (1958)、『去年の夏、突然に』Suddenly, Last Summer, (1959) が立て続けに映画化された。前者はポール・ニューマン、後者ではモンゴメリー・クリフトという名優がゲイの男を演じている。『焼けたトタン屋根の猫』では、ゲイを示すような表現は徹底的にカットされており、今、何も知らない観客が見れば、ポール・ニューマンの苦悩する姿や荒んだ行動の理由が不可解であろう。勿論、当時、テネシー・ウィリアムズの原作はすでによく知られた名作であったから、観客はすべてが分かった上で観て理解していた。

一方、『去年の夏、突然に』のモンゴメリー・クリフトの演じたゲイは気の毒なくらい化け物のように描かれており、まるで40年代の『フランケンシュタインの花嫁』のようであったという¹⁾。それもそのはず、この2作品は、ジェームズ・ホエール James Whale が監督した映画であった上に、実はこのホエール自身ゲイであることを明かしていた数少ないハリウッドの映画人であった。これらと相前後する2つの映画『理由なき反抗』Rebel Without A Cause (1955) と『噂の二人』The Children's Hour (1961) も同様な映画で、ゲイであることが社会や共同体との軋轢を生み、もがき苦しむ主人公が描かれている。「理由なき反抗」は、ご存知ジェームス・ディーンの出世作となった青春映画であり、そのことだけでも十分有名であるが、主人公であるディーンを敬愛するサル・ミネオが演じる年下のゲイの男の子が自己嫌悪に陥っていく過程が映画の重要な部分となっている。その意味では「理由なき」どころか「理由あり」なのであるが、ゲイである部分はまったく表現されず、ゲイであるらしいことがネガティブに描かれている。もう一本の The Children's Hour は、スコットランドのウィリアム・ラルフヘッドの原作小説を劇作家リリアン・ヘルマンが舞台劇にし、1934年にブロードウェイで上演された名作で、ロングランを続けた劇であり、内容はすでに知られているものであったが、演じているのがシャーリー・マックレーンとオードリー・ヘップバーンという2大女優である。勿論、ゲイはシャーリー・マックレーンによって演じられており、もがき悲しむこの姉を妹の（ストレート）なオードリーが真剣な献身と愛情で支えるという構図になっている。

第7節 新しいコメディの中のゲイの姿

～名匠ビリー・ワイルダーが描いたゲイの賢人～

このような状況の中であって、特筆すべきコメディが名匠ビリー・ワイルダーによって製作された。「お熱いのがお好き Some like it hot (1959)」である。先に述べた「去年の夏、突然に (Suddenly, Last Summer, 1959)」と同年である。マリリン・モンローがバンド歌手を演じて、そのコケティッシュな魅力で観客を引きつけたドタバタ喜劇であるが、「ゲイ的な」役柄を担ったの

は、コメディ俳優としてすでに名声を博していたトニー・カーティス、ジャック・レモンであった。映画の中での彼らはストレートなミュージシャンであるが、聖バレンタインの虐殺事件で抗争中のシカゴのギャングに追いかけられたために、女装して女性ジャズバンドに潜り込んで追手をかわす。そして、演奏旅行でのドタバタがあり、追っかけっこありというストーリー展開をみせるのだが、最後にトニー・カーティスが彼を女性と見間違った年上の男性に恋心を告白されるという「落ち」がある。トニー・カーティスは、女装を脱ぎ捨て自分が男であることを告白し、求愛に応じることができないと断る。そのあとの年上の男のパンチラインは、おそらく長く記憶に残る名台詞であるが、今ここでは記さない。この女装した男性の映画は、第5章でとりあげる「トツィー」から「ミス・ダウトファイヤー」に至るまで、様々なバリエーションを見せることのできる形式であり、その土台をワイルダーが確定していったことは特筆すべきことである。この映画は見掛け上、ひとりのゲイも出てこないように見えながら、実は本質的な形でゲイは出ていたのである。【この年には、もう一本特筆すべきコメディ Pillow Talk (1959) : 邦題もピロートークで、枕語り、寝物語りの意。監督：マイケル・ゴードン Michael Gordon、脚本：スタンリー・シャピロ Stanley Shapiro、主演：ロック・ハドソン Rock Hudson, ドリス・デイ Doris Day」がつくられている。Pillow Talk (1959) は、主題歌もジャズ調のスウィングする曲で、現在まで歌われている。ロックハドソンは、この映画のなかで、ストレートな男性がゲイのフリをする役を演じている。相手役は歌手としても有名なドリスデイである。この2人の友情を描くのだが、ドリスデイは相手がゲイなので、信頼できる女性の友人であると思っている。したがって、寝物語 Pillow Talk が可能な相手なのである。結局は、男性が最後にストレートであることを明かして、彼女への友情が男女の愛情であることを告げる。二人は結ばれ、めでたしめでたしとなるストーリーが観客をほっとさせる。となるはずであるが、実はロックハドソン自らがゲイであることをすでに知られていたから、話は複雑になる。ゲイの役者がストレートな役を演じているのだが、劇中で彼はゲイのフリをする演技をしなければならないのである。実に屈折した状況になっている。】

III 章. 多様になったゲイ映画の潮流

第1節 暗い社会派映画の中のゲイの姿

1975年に非米活動委員会がなくなり、厳しい製作倫理規定が大幅に緩和されはじめると、ゲイの描き方にも若干の変化が訪れるようになる。確かに、自己嫌悪に陥るゲイの映画は少なくなったが、バイオレントなゲイの犯罪映画が再びアクション映画のスタイルで復活する。「狼たちの午後 A Dog Day Afternoon、監督：シドニー・ルメット Sidney Lumet、脚本：フランク・ピアソン Frank Pierson、主演：アル・パチーノ Al Pacino (1975)」は、アカデミー賞5部門にノミネートされ、オリジナル脚本賞をピアソンが受賞した映画で、実話に基づいた映画である。ゲイの映画というより、ゲイを取り巻く人間模様を描いている。アル・パチーノの演ずるサニーというチンピラが若い手下の男と共に、ふとしたことから人質をとった銀行強盗事件を起こす。その理由の一つが、サニーの愛人であるゲイ（クリスサランドンがトランスジェンダー的ゲイ役を演じている）の性転換手術の費用をひねり出すことであった。サニーの正妻や母親が説得に努めたり、警察とのやりとりがあたりして、次第にサスペンスが増していく。最後にはサニーは捕まってしまうのであるが、舞台がニューヨークのブルックリンの都市銀行でもあり、都会的でスピーディーな展開の映画となって興行的に大成功を収めた。通常の世界での実話に基づいたストーリーであるだけに、都会の生活においてゲイの存在が珍しくはなくなってきたことを示す例となっている。「ミッドナイトエクスプレス Midnight Express、監督：アラン・パーカー Alan Parker、原作：ビリー・ヘイズ

Billy Hayes、脚色：オリバー・ストーン Oliver Stone、主演：ブラッド・デイビス Brad Davis ランディ・クエイド Randy Quaid、ジョン・ハート John Hurt (1978) は、「狼たちの午後」と同様に、実話に基づいたストーリーである。もっとも、映画公開後に実話に基づいていないと多方面からの非難を受けたが、6部門でアカデミー賞のノミネートを受け、2部門（音楽、脚本賞）で受賞した。アメリカの大学生がトルコまで赴いて、麻薬であるハッシッシをアメリカの持ち出そうとしたことでトルコの司法当局に捕えられ、獄中で男性看守からレイプされたり拷問をうけたりする。数年後に、恋人の助けによって脱獄に成功しアメリカに戻るというストーリーである。トルコ当局がこの映画の暴力シーンや司法制度の描き方が事実と異なっていると抗議を行った結果、アメリカ側のスタッフが謝罪したという。また、原作の本とも違いがあつて、映画的な描き方がさまざまな問題を起こした。

これらの2本の映画は、実話に基づいているという点で、これまでのゲイ映画とは根本的に異なっている。実社会でのゲイの暗い側面を風俗的な事実として提示しているのも、ゲイそのものがテーマになっているわけではない。しかし、社会の中に確実にゲイが存在することが強調されており、犯罪に絡みうることも示唆されている。作り物から実話への移行が次第に進んでくるといった特徴がこの時期から見出され始めた。

しかし、ゲイそのものを扱った風俗的な映画も名作として決して作られてないわけではなかった。時代はやや先行するが、『Midnight Cowboy』邦題：真夜中のカウボーイ (1969)、(監督：ジョン・シュレシンジャー John Schlesinger、脚本：ジェームズ・ハーリヒー James L. Herlihy、主演：ダスティン・ホフマン Dustin Hoffman、ジョン・ボイト Jon Voight) は、多くの意味でゲイの生活や人生の悲しみの内容を豊かに伝える名作である。この映画の主人公が都会の片隅の最底辺に暮らす人々であることから、男娼、詐欺などのシーンがリアルに描かれており、X-ratedの映画であったにも関わらず、アカデミー作品賞、監督賞、脚本賞を受け、主演の2人もノミネートされた。(保存版アカデミー賞 2004) 主題歌もカントリー歌手のハリーニルソンがバンジョーの軽快なアルペジオに乗せて歌う「Everybody's Talkin'」で、映画にペーソスを加えている。この映画でボイトが演じているのが、複雑な生い立ちをもったテキサス出身のジョーバックという名のカウボーイで、風雲の志をもってマンハッタンに出てきたのだが、実際は安レストランで皿洗いの仕事をする羽目になっているという設定である。そこで、三流の詐欺男であるラッツオ（ホフマン）と知り合うが、いつも金を巻き上げられ、金に困ってしまう。ラッツオに騙され、ポン引きを紹介され、最後は男娼をさせられる。ジョーの派手なロデオ姿や田舎くさい誠実さと、都会で混乱した結果陥る反社会性などが混じって、「ゲイのカウボーイ（バイセクシュアルの傾向もある）」が見事に顕在化されて、観客はこの役柄に感情移入をする。2人の孤独な男たちの友情とも愛情ともいえる関係で繰り広げられる日常生活は、ラッツオの病によって、突然終結を迎える。最後の望みをかなえるために、寒々としたニューヨークからフロリダへのバスに乗り込んだ2人の短い旅行、病のために失禁してバスの座席に座ったまま静かに息を引き取るラッツオ、かれの体を傍らで支えながら窓の外のパームツリーをぼんやりと眺めるジョー、彼らをやさしく包むように流れる主題歌「Everybody's Talkin'」。このラストシーンの感動は広く大衆の心をとらえた。「真夜中のカウボーイ」のテーマは、「ゲイであること」自体ではないが、かれらの底辺の生活と「ゲイであること」の関係と意味が切々と語られる映画となっている。たしかに、この映画はゲイを風俗的に扱っているように見えながら、根本のところではゲイの男が示す人間への優しさやこまやかな愛情が十分に伝わってくる。このような普遍性を勝ち得たという意味で、「真夜中のカウボーイ」は大きな足跡を残したといえる。

このような問題作が次々と作られる一方で、やはり古典的なゲイの映画が大衆からは変わらず愛されており、軽妙なゲイ映画はまだまだ健在であった。『The Gay Deceivers、邦題：コンチネンタル』(1969)は、本小論でクレジットを与えるほどではないB級ムービーであるが、時代的な背景を多少もっているという意味で取り上げた。ベトナム戦争の徴兵逃れをするためにゲイのフリをする2人組の男が登場するコメディである。映画自体は、ゲイを小馬鹿にしているという意味であまりほめられたものではないが、B級映画がしばしばアメリカ社会の本音の部分表現していることも事実であるので、ゲイの問題がナーバスになるほどではなくなったこと、その代わりに特別さや新鮮さをあまり持たなくなってきたことを示す意味で取り上げた。

第2節 スタイリッシュなゲイの姿再び

それに比べると、以下に示すゲイの登場する映画は、かなり洗練された物語や音楽に満ちたもので、ゲイの風俗とゲイの人たちの芸術性というあらたな組み合わせが映画表現のなかで効果的に示されたものとして重要である。「The Ritz (原題)、監督：リチャード・レスター Richard Lester、脚本：主演：ジャック・ウェストン Jack Weston, リタ・モレノ Rita Moreno (1976)」、「Cabaret 邦題：キャバレー、監督：、主演 Liza Minnelli (1972)」、アメリカのスタッフで撮られたイギリス映画「Rocky Horror Picture Show 邦題：ロッキーホラーショー、監督：Jim Sharman 脚本：Richard O'Brien 主演：Tim Curry Susan Sarandon (1975)」、それに、フランス映画ではあるが、アメリカで成功を収めリメイクをされた「La Cage aux Folles、原題の意味は“鳥かご”であるが、同じ羽をもった鳥は同じかごにはいるという諺 (Birds of a Feather)、日本流には“類は友を呼ぶ”の意 (1979)」などである。舞台劇の翻案あり、映画の舞台自体が劇場やホテルという非日常的なステージ空間であったりするスタイリッシュな映画が、この時期には数多く企画されたのである。ただし、そこにはゲイの芸術家やゲイの俳優、ゲイの芸人などが登場して、その才気煥発としたパフォーマンをつぶり見せるという趣向が中心であり、純粋なエンターテインメント映画と思って差支えない。1982年に製作された『Victor/Victoria、邦題：ビクター・ビクトリア、主演ジュリー・アンドリュース Julie Andrews』もこの系列に入るが、ここでは映画にジュリー・アンドリュースのゲイのマネージャーが登場して、映画の筋に積極的に絡んでいく。

映画の中でのゲイの扱いは暖かく理解に満ちたものである。その意味では、CabaretやRitzにおけるスパイス的なゲイのキャラクターではないために、より進んだゲイの扱いになっている。ジュリー・アンドリュースの男役は宝塚的な男装の麗人をさらに男っぽくしており、また女役のほうも大げさな女役になっているので、その分だけキャンプ的な要素がたっぷり入っている。ゲイとキャンプの組み合わせという部分が新奇さを狙っているのは確実だが、こうして軽妙なゲイ映画も新たな地平線の上を進んでいくのである。

第3節 ゲイの人権活動を描くドキュメンタリー

～エイズの苦しみや偏見と戦い連帯へ～

時代は完全に変わった。80年代初頭、エイズという病に引き起こした悲劇によってレズビアン・ゲイコミュニティにひとつの変化が訪れる。エイズを描くことで表現された人権侵害の現実無策な政府や製薬会社に対して、ACT-UPなどの活動団体が声を上げ、ゲイとレズビアンの間これまでになかった連帯が生まれ、それがやがて力強いアクティビズムとなって、多くの主要大都市にデモやパレードの推進力となった。そして、それによって82年以降、同性愛は重要なテーマとなっ

ていったのである。(出雲 2005,p9)

このような、社会性を帯びたゲイの活動は大きくうねって、人権運動やエイズという新たな社会問題へ果敢に挑むことになっていくのだが、その背景「連帯」や「勇気」を思い出させる数々のドキュメンタリー映画がつくられたことが原因として挙げられる。John Scagliotti と Greta Schiller の二人の監督は、GLBT 社会の連帯を描いたドキュメンタリー作品 (Before Stonewall) を製作し、ニューヨークのグリニッチビレッジにあった Stonewall Inn の同性愛の住人達とニューヨーク市警の対立がグリニッチビレッジの住人の多くを巻き込んで大きな暴動へと発展する過程を描いた。この 1985 年のドキュメンタリー作品を通して 1969 年に起こったニューヨークでの暴動がゲイとレズビアン社会の連帯を生み出すきっかけになり、公民権運動とも連帯していく過程を詳しく紹介したのであった。これは、14 年後に「After Stonewall 1999」という続編を生む。また、ロブ・エプスタインは、『The Time of Harvey Milk 1984』『Common Threads: Tales From The Quilt 1989』という 2 本のドキュメンタリー映画を作製した。ハーベイ・ミルクはゲイであることを明かしてカリフォルニアの公務員としてゲイの人権運動の活動した人物で、2008 年にはショーンペンがミルクに扮してその人生を描いた映画が作られた。また、分ち合う糸 (common threads) は、エイズで亡くなった人たちの姿を一枚の大きなキルトに綴る活動を記録したもので、ダスティン・ホフマンがナレーションを担当している。日本流に言えば、千羽鶴を折るような作業である。ただし、劇映画というジャンルにおいて、エイズと闘う物語の映画が作られるのは、その後数年してからであった(次章で詳しく述べる)。エイズの問題は、伝染病への恐怖心からゲイへの新たな差別意識を助長していく。そのような社会状況にあって、映画がマスメディアを補完する形で、社会の動きをジャーナリスティックに伝えるという役割を果たしていたことは興味深い。

ゲイを扱った劇映画に話題を転じる。この時代は多くの名作が名優によって演じられている。内容は重いものから軽いものまで様々であるが、知性とエンターテインメントが程よく融合している映画が多い。内容的には、ゲイと家族の関係をテーマにしたものやエイズの問題を取り込んだものなどがある。1978 年に出版されたジョン・アーヴィングの「ガープの世界」を映画化した「The World According to Garp」、邦題：ガープの世界、監督ジョージ・ロイ・ヒル、原作ジョン・アーヴィング、脚本スティーブ・テシック、主演ロビン・ウィリアムズ (1982)」は、中でも秀逸な傑作である。一癖も二癖もある登場人物が入り乱れ、フェミニスト、性転換種々をうけて女になったフットボール選手などとガープが織りなす不思議な世界が描かれている。また、「Desert Hearts」、邦題：デザート・ハート、監督：ドナ・デイチ、主演：(1985)」は、最初にレズビアンの問題を正面から取り上げた映画として有名である。「Kiss of the Spider Woman」、邦題：蜘蛛女のキス、監督：主演：ウィリアム・ハート (1985)」は、南アフリカの黒人政治犯の刑務所で、ゲイの男 (ウィリアム・ハートが好演) が囚人達と不思議な交流をする映画である。虐げられたもの同士の触れ合いを描いているが、エキセントリックすぎて普通の観客には見るのが苦痛かもしれない。

「Parting Glances 監督ビル・シャーウッド」(1986)」は、最初にエイズの問題を取り上げた映画として重要であり、レーガン時代の都会のゲイカップルの生活と病魔に冒されたゲイ達への差別が描かれている。監督のシャーウッド自身がエイズで死亡したこともよく知られた話で、自らの体験がゲイ映画になるということがこの時代から散見されるようになる。ゲイの男がストレートな女性と結婚する羽目になったらどうなるかという身近なテーマを描いたコメディとしては「Torch Song Trilogy、邦題：トーチソング・トリロジー、監督：ポール・ボガード、主演：アン・バンクロフト、マシュー・ブローデリック(1988)」といった名作があり、往年の名女優アン・バンクロフトまでもが登場するので物語に奥行きがでていて面白い映画となっている。

第4節 女装した男が気づく女性性の本質

～トッツィーからミセス・ダウトファイヤーまで～

1980年から1990年代にかけて、ストレートの男性が女装する映画が製作された。これは、「お熱いのがお好き」の続編ともよべる映画である。厳密に言えば、これらはゲイ映画ではない。主人公の男性は、社会的な理由で女装することを自ら選択するのであって、ゲイではない。トッツィーにおいては、仕事を得るために。ミセス・ダウトの場合は、別居中の子供に会うために女装することを選ぶ。1982年に製作された「Tootsie、邦題：トッツィー、監督シドニー・ポラック、脚本ラリー・ゲルバート、主演ダスティン・ホフマン」では、40歳になる俳優のマイケル・ドーシー（ダスティン・ホフマン）がその完璧主義が災いして周りより上手くいかず、どこからも雇ってもらえなくなってしまう。4カ月仕事がなかったある日、演劇の生徒サンディが病院を舞台にしたソープ・オペラのオーディションを受けるといので同行するが、サンディは落されてしまう。一計を案じたマイケルは女装し、“ドロシー・マイケルズ”という名の女優としてオーディションを受け、合格してしまう。その後、一躍のスターとなったドロシー（マイケル）は、共演者のジュリー（ジェシカ・ラング）と知り合う。シングルマザーのジュリーは、年長の“女優”であるドロシー（マイケル）に信頼と友情を感じるようになるが、マイケルの方は、ジュリーに恋心をいだき、ある日ドロシーにキスをしようとする。ジュリーは、ドロシーをレズビアンと勘違いしてしまう。やがてマイケルは自分が女優であることに耐えられなくなり、男性だと告白する。ドタバタ騒ぎの末、ジュリーはマイケルの愛を受け入れる。

この映画の中で、マイケル自身はゆるぎない男性なのだが、女性を演じているうちに女性性を次第に獲得していく姿が描かれる。考えようによっては、マイケルに元々備わっていた女性性が次第に表に現れていくとも言えるかもしれない。彼は、ジュリーからはレズビアンと間違えられたり、ジュリーの父親からはゲイと間違えられたりするところも、興味深い。マイケルの受け取られかたは、単なる女装ではなく周囲の人々にとっては深刻なジェンダーの混乱を巻き起こすからである。したがって、このようなマイケルの状況自体がトランスジェンダー的であるともいえる。脚本のラリー・ゲルバートは、ユダヤ系アメリカ人で、テレビや映画の脚本家として活躍した。

1993年に製作されたMrs.Doubtfire（邦題：ミセス・ダウト、監督クリス・コロンブス、主演ロビン・ウィリアムズ、原作アン・ファイン、脚本ランディ・メイエム・シンガー）は、原作がイギリスの児童文学者アン・ファインが描いたMadame Doubtfireでランディ・メイエム・シンガーが映画のために脚色したものである。映画の粗筋は次のようなものである。日ごろから役作りにこだわりがある声優ダニエル・ヒラード（ロビン・ウィリアムズ）はいつも現場でディレクターと衝突し、ついに解雇されてしまう。彼には、キャリアウーマンの妻であるミランダとの間に3人の子供がいる。しかし、芸術家肌のダニエルは家庭人としても妻の信頼を得られず、解雇を機会に離婚してしまう。そして3人の子供たちと週1回の面会に満足できないダニエルは、素晴らしいアイデアを思いつく。キャリアウーマンである妻が、ナニー（乳母）を探していることを知り、女装をして子供たちの世話をすることで毎日会えることに気づく。ナニーとしての仕事をするうちに、ダニエルは女性の役割を気づき、トッツィーのマイケルと同じように自らの女性性に目覚めていく。この女装を手伝うのが、ダニエルの兄であるフランクが演じている。しかし、最後には同じようなドタバタ劇があり、正体がばれてしまう。物語のエピローグの中でダニエルは、ミセス・ダウトとして、テレビで子供たちに物語を語って聞かせるストーリーテラーとして成功する。子供たちは離婚した父親を受け入れると同時に、ミセス・ダウトでもある父親の尊敬の念を抱くようになる。

ミセス・ダウトのダニエルが経験する女性としての役割はトッツィーのマイケルが経験するものと瓜二つである。女装と女性の仕事を通して自らの女性性に目覚めると同時に、女性に対する理解を深めていく過程も共通している。しかし、異なるのはマイケルが俳優である特技を活かして女装したのに対し、ダニエルは、ゲイの兄フランクに全面的に女装を手伝ってもらったことである。話はそれるが、このフランクを演じているのがハーヴェイ・ファイアスタインというトニー賞を受賞した舞台俳優。『屋根の上のヴァイオリン弾き』のテビェを演じている。フランクとダニエルが女装しながら、『屋根の上のヴァイオリン弾き』の名曲“マッチメイカー”を歌うシーンは、パロディとして秀逸である。ファイアスタイン自身はカミングアウトした本物のゲイであり、ゲイたちの人権擁護運動を行っていることで有名である。このように、「ミセス・ダウト」では、本物のゲイの俳優が堂々と登場し、より現実的なゲイの姿を映しだすところに大きな違いがあり、10年の時の経過を感じさせる。「ミセス・ダウト」におけるゲイの登場人物は、主人公を助ける心優しい家族でもあり、ユーモアに満ちた思いやりのある人物として描かれている。また、詳しく見ていくと、決定的な違いがトッツィーとミセス・ダウトの間に存在する。トッツィーの場合、女装したドロシーという人格が物語の最後に消失して成長したマイケルという存在のみが残るが、ミセス・ダウトでは、ミセス・ダウトという存在は消えることなく、ダニエルと一致し重なり合う。女性として存在したトッツィーが消えてしまうことに、“彼女”が魅力的なだけに、現在の我々は多少失望と違和感を感じるが、この当時の映画のラストとしては当然のことだったのかもしれない。しかし、ミセス・ダウトでは、魅力的なダウトファイアーがダニエルのもうひとつの実存として存在し続ける。観客にとっては、こちらの方がほっとする。この多重的でトランスジェンダー的な存在の形式を私たちは心地よく感じるのは、時代が本当に変わった証拠であるかも知れない。

IV 章. 理解が深まりつつあるゲイ映画の現状

第1節 根強く残るゲイへの偏見

～エイズを描くことで表現された人権侵害の現実～

80年代初頭、エイズという病に引き起こした悲劇によってレズビアン・ゲイコミュニティにひとつの変化が訪れる。無策な政府や製薬会社に対して、ACT-UPなどの活動団体が声を上げ、ゲイとレズビアンの中にこれまでにない連帯が生まれ、それがやがて力強いアクティヴィズムとなって、多くの主要大都市にデモやパレードの推進力となった。そして、それによって82年以降、同性愛は重要なテーマとなっていったのである。（出雲 2005,p9）

そこで、1990年頃を舞台としたエイズとアメリカ社会を描いた『Philadelphia』（邦題：フィラデルフィア、監督ジョナサン・デミ、主演トム・ハンクス 1993）について考察した。長谷川によれば、80年初頭、一見確実にゲイ解放運動が進み、ゲイが市民権を獲得しつつあったアメリカで、エイズの流行が最初にゲイ・コミュニティを襲ったという。保守的なレーガン政権は「エイズは健全な一般のアメリカ市民には関係ない病気だ」として積極的に対策を採らず、当然のようにマイノリティであるゲイ・コミュニティの危機を無視し続けた。（2005p83）

『フィラデルフィア』の制作、公開された時代はアメリカ社会が膨大な打撃を破りエイズという現実を直視し、やっと本腰を入れて闘いはじめた時期であった。

物語は、勤勉で成功したゲイの弁護士アンドリュー・ベケット（トム・ハンクス）の突然の解雇から始まる。表面上は弁護士としての不適格性が理由だが、実は同僚のひとりが彼のカポジ肉腫に気づき、エイズ（後天性免疫）

ミラー弁護士（デンゼル・ワシントン）は HIV やゲイに対する偏見を持ちながらも HIV についての事実を知り、アンディと少しずつ信頼感や友情が芽生え、弁護に協力する。

この映画についてさまざまな評価がされている。歴史学博士のスーザン・K・バートンによれば、この

第2節 新しい視点によるゲイとレズビアンのお話

～ゲイのカウボーイの純愛映画と女流文学者の苦悩のお話～

男性的な世界と思われていたカウボーイたちの間で、同性愛的関係が存在しえた。2006年に製作された **Brokeback Mountain**(邦題：ブロークバックマウンテン、監督アン・リー、原作アニー・プルー、脚本ラリー・マクマートリー、主演ヒース・レジャー)はゲイを主人公にした古典的なメロドラマである。アカデミー監督賞など3部門を獲得した。1963年のワイオミングを舞台にしたカウボーイたちの間で繰り広げられる友情と愛情の混じった関係を描いた映画である。ブロークバックマウンテン山中での羊の放牧の季節労働者としてイニス（ヒース・レジャー）とジャック（ジェイク・ギレンホール）が雇われ、2人はやがて恋におちる。季節労働者としての仕事を果たし、別れた2人はそれぞれの人生を歩む。イニスもジャックも女性と結婚し、同性愛者だということを隠す。4年後、彼らは再会し、愛し合っていることを確信し、愛を誓うが、ジャックは事故で亡くなる。ひとりになった。

しかし、この映画に描かれたゲイの男性達の愛のお話は、以前から描かれてはいた。「真夜中のカウボーイ」では、ジョン・ボイトが都会へ出てきたゲイのカウボーイを演じている。この映画は、都会へ出てくる以前のゲイのカウボーイが実生活ではストレートとして生きつつも、閉ざされた山中にあって、ゲイのパートナーと知り合って愛し合ったらどうなるのかという状況に答える内容となっている。ストレートの生活とゲイ同士の愛を貫く姿を重ねて描いたと言う意味で状況設定が新しく、純粋な愛の交流を描いているという部分も共感を勝ち得る内容となっている。

この他に、**Milk** が今度は伝記映画の形でリリースされたり、**The Hours** が名女優のメリル・ストリープ、ジュリアン・ムーア、ニコールキッドマンを得て重厚な作品となっている。バージニアウルフの私生活のレズビアンとしての悩みを皮切りに、3世代の異なった時代に生きた3人のレズビアン女性の生活が、社会の変遷とともにどのように変化したかをあますところなく描いている。